

[特別支援教育]

発達障害通級指導教室の巡回指導校における取組

－担当者の役割と円滑な教室運営－

秦野 真一*

1 研究の目的

発達障害通級指導教室を利用する児童が年々増加している。また、文部科学省からは、通級による児童の教員配置について、児童又は生徒13人につき教員1人を算定する基準が新設された。実際に上越市でも、新たに発達障害通級指導教室が新設され、新任の通級担当職員も増えている。さらに、通級指導教室の担当者が本務校以外に他校を兼務し、巡回指導するようになっている。巡回指導は、対象児童にとって在籍している学校で指導が受けられるため、保護者の送迎がいない、移動に時間が掛からないなどのメリットがある。

通級担当者の業務は、発達障害のある児童への指導だけでなく、個別指導計画の作成や担任や保護者との連携、教育相談等、多岐に渡る。通級担当者には専門性が求められ、その役割は重要である。笹森・廣瀬（2008）は小学校のLD等通級指導教室の担当者に期待される役割を4点にまとめている。

①子どもの自信や意欲の回復と情緒的な安定を図ること②学級担任や学校への具体的な支援③地域の身近な相談機関、センター的機能④特別支援教育の推進の中心として情報発信や啓発としている。さらに、課題として通級指導教室を担当1人制で行っているところでは、相談する人がいない状況であると指摘している。

筆者はこの他に、保護者支援も通級担当者の重要な役割であると考え。保護者の困り感に寄り添い、学校と保護者が協力関係を築いていくことが重要である。

通級担当者に多くの役割が期待される一方で、通級指導教室の新設、巡回指導を経験年数の少ない担当者が担っていく現状があり、今後ますます多くなることが予想される。

このような状況の中で、発達障害通級指導教室が校内に新しく設置される学校において、どのように通級指導教室を運営し、通級指導教室担当としての役割を担っていくかについて検討していく必要がある。

本論文では、発達障害通級指導教室担当である筆者がA小学校で週1回の巡回指導を開始してからの取組をまとめ、成果と課題を考察する。そして、通級指導担当が巡回指導校で指導を開始する際の役割や円滑な教室運営について考える。

2 実践の内容と方法

(1) 通級指導教室運営計画の作成、提案

校内に通級指導教室が開設されるにあたり、年度初めの職員会議に参加し、通級指導教室の運営計画について提案する。資料の中には、通級指導教室の目的や対象となる児童、特別な指導である「自立活動」の概要について示すとともに、通級担当者の業務内容や通級指導開始までの手順について説明する。設置校の職員と通級指導教室の目的や担当者の役割について共通理解を図る。

(2) 教室環境の整備

通級指導は別室での指導となるため、校内に通級指導用の教室を設ける。教室は広すぎず、静かで刺激が少ない落ち着いた環境を整える。

また、体温調整が苦手な児童もいるため、冷暖房の完備やデジタル教材を見やすくするため遮光カーテンの設置、棚にカーテンを張り目隠しをするなどの学びやすい環境を整える。

学校からは、通級指導教室専用として、教材を写すテレビや児童用の机椅子、対象児の個人情報保管できる鍵付きロッカー、ホワイトボード等を借用する（写真1）。また、立て看板も借用し、「学習中」の札を張り、看板が立っているときは、廊下を静かに通行するように協力を求める。



写真1 通級指導教室の環境

*上越市立大湊小学校

図 1 個別の指導計画

援策について説明する。保護者にとっては通級指導教室での学習は未知であるため、指導内容や指導方法などを実際の教材を見せて説明したり、指導の様子を写真や動画を使って紹介したりする。

そして、保護者に継続して通級指導教室での指導を受けるかどうかについて意向を確認する。その際、対象児の意向も確認した上で、決定する。

⑤ 通級指導の継続と入級の手続き

保護者の同意を得た上で、引き続き通級指導を継続する。そして、就学支援委員会通級部会で正式に入級の手続きを踏む。

⑥ 通級終了の手順

正式に通級を開始してから、個別の指導計画をもとに目標の設定、具体的な支援の実行、それに対する評価をしていく。通級が終了する基準として、個別指導計画にある目標が達成されたかどうかについて、通級の指導の場や学級、家庭での様子を観察し、総合的に評価する。また、状態が改善傾向にある場合に、計画的に指導が終了できるように保護者や担任に方向性を示していく。

(4) 担任や保護者との連携

通級指導教室を利用する児童は、周囲の対応が不十分であると生活の様々な場面で不適応を起こすことが多い。通級による指導は連続性のある多様な学びの場であることから、通級による指導は連携による教育と言われている。それは、通級での学びや成果が学級や家庭でも生かされ、学習や生活の充実につながることを意味する。そのためには、担任や保護者との連携は不可欠なものである。

① 担任との連携

ア 互いの授業を参観し合う

通級担当者は対象児の学級での様子を知るために、定期的に授業や休み時間の様子を直接参観する。担任は、通級指導教室での学習の様子を参観する。通級担当者にとっては、学級集団の中での課題を把握したり必要な支援を考えたりすることができる。学級担任は、通級で学んだことを学級の中で生かせるようにしたり、どのような個別配慮が必要なのを理解したりする機会となる。

イ 指導後の学習記録の配付

毎回の学習後には指導内容と対象児の様子を記録したものを担任に渡し、通級指導教室での対象児の様子を知ってもらう。学習記録をもとに、対象児が通級教室で頑張っていることなどを担任からもフィードバックしてもらい、意欲や自信につなげていく。

ウ 支援会議の実施と個別の指導計画の作成

学期に1回程度、担任や保護者、特別支援教育コーディネーターと支援会議を実施し、情報交換をする。個別の指導計画をもとに、対象児の課題を共有し、学級、通級教室のそれぞれの場で、担任と通級担当者がどのように指導・支援するかを検討する。

エ 担任への助言

通級担当者が、週に1日兼務校にいるため、朝の時間や昼休みなど授業以外の時間に教室や職員室で担任と気軽に話し合う場をもつ。最近の様子や担任が気になっていること、通級での様子を情報交換する。担任が対象児への対応で悩んでいる場合は、その場で一緒に考え、助言する。

オ 通級担当者による学級での授業の実施

通級担当者が対象児の学級で授業を行う。通級指導教室で学んでいるスキル学習と同様の内容、進め方をし、対象児が学んだスキルを発揮しやすくする。担任からは通級担当者の指示や教示の仕方、授業の進め方などを参考にしてもらう。また、児童のどんなところを褒めているか、どのタイミングで言葉を掛けているかなどを参観してもらい、対象児へのかかわり方を考える機会にする。

② 保護者との連携

ア 通級指導教室の授業参観

保護者には指導日時を事前に知らせ、通級での学習の様子を参観してもらう。学習の様子を参観し、対象児の成長や課題を直接参観してもらう。また、学習内容だけでなく、通級担当者の課題への取り組みませ方や対応の仕方などを見てもらう。

今日は「書く」学習で、太めの三角えんぴつを使いました。「こっちが机、書きやすい」と感想も書いていました。くもんのこともえんぴつ、2Bです。

()月()日(金) **さん個別学習**

<学習内容>

1. 目の運動
・より目をする。目をすばやく左右上下に動かす。
・目をゆっくり1周まわす。
・目で線をたどってゴールをめざそう。
・途中にある果物を言っていこう。
よく集中しています。

2. 漢字の塗り絵・迷路
・隠れている漢字を見つけて色を塗ろう。
・迷路

3. ローマ字②
・ka ki ku ke ko を使って読む、書く。 か き く け こ
ローマ字の読み書きが上手です。書くことも上手になりました。

4. 点つなぎ・見比べレース
・必要な線を正確に描こう。 正確な線が上か下か、指を当てて
・形を比べて同じか違うか考えよう。 正確な線が上か下か、指を当てて

5. 漢字を読もう
・3年生で学習した漢字を読もう。 ちゃんと書ける漢字も読んでいる
・3年生で学習した漢字を読もう。 ちゃんと書ける漢字も読んでいる

6. 漢字のたし算
・パーツを組み合わせて漢字をつくろう。 声に出して読む
・漢字をパーツに分けてみよう。 神速だね。

次回は 月 日(金)です。

担任 保護者

校庭

図2 学習記録

ための指導であり、単なる学習の遅れを取り戻すための場ではないことを共通理解できた。

また、通常の学級の授業を抜けて通級指導を受けるため、抜けた部分の授業内容を補う必要がある。どの時間に対象児が通級指導を受けるかを事前に伝えておくことで、担任は年度初めの教育課程を編成する際に、補習のために過度な負担が掛からないような時間割りの工夫を考えてくれた。そして通級指導を受けることで、通常の学習に支障がある場合は、休みや時間等に補習を行うなど、学習を保障する場を設けてくれた。

(2) 教室環境の整備

視覚刺激の少ない環境を整えることで、特に注意集中の苦しさなどの特徴をもつ児童にとっては、やるべきことに意識を向け続けやすくなった。また、個別または、ペアでの指導であったため、広すぎない空間が落ち着いて取り組むことに有効であった。

聴覚的な刺激のコントロールが苦手な児童にとっても、静かな環境を整え、教室内外からの声や音などを最小限にとどめることができた。

視覚的にも聴覚的にも、刺激の少ない環境を整えることができた。

(3) 通級開始・終了までの手順

通級による指導の開始や終了をする際には、的確な実態把握と慎重かつ丁寧な手続きが必要である。的確な実態把握という点においては、児童の見せる姿は多様であり、背景にある要因は異なる。通級での指導が必要か否かを様々な方法、視点で検討されることが重要である。そして、通級開始時に明確な目標を保護者、学校職員との間で合意形成を図ることが、通級終了の判断の基準となるとともに、学校と家庭において指導・支援の協力体制を築くことにつながった。

重要なことは、通級開始から終了までの基本的な手順を、学校体制としてシステム化することである。その手順を機能させていくことで様々なケースに対応していくことができる。

(4) 担任や保護者との連携

① 担任との連携

担任からの聞き取りから、「児童の特性や困難さの背景が理解できた」「通級に通うようになって、落ち着いて学習に取り組む時間が増えた」「通級での指導の仕方や校内委員会の資料が学級での支援に役立った」「気軽に相談できた」などの意見が聞かれた。

担任との連携を通じ、児童の実態を共通理解することができた。そして、支援の意味や必要性を理解し、担任と通級指導担当との間で支援策の共有化が図られた。担任が、具体的な支援を実行することで、児童の困り感の軽減にもつながったと考えられる。

また、巡回指導校になったことで、これまでよりも担任と直接話し合う機会が多くなった。担任と通級担当が気軽に相談できる関係性を築くことが重要である。週1日でも通級担当が校内にすることで、他校通級よりも気軽に相談できる場や時間などの条件が整い連携がしやすくなったと考えられる。

② 保護者との連携

通級での授業を参観した保護者から次のようなコメントが寄せられた。

・ちょっとしたことで褒めることの大切さが分かりました。参観することができてとても良かったです。家ではなるべくイライラしないように気を付け、『褒めて伸ばす』ができるように頑張らねばと思っています。

・通級指導教室での漢字の学習の様子がよく分かりました。先日、初めて漢字カテストで合格することができました。最近、今までしなかった漢字の練習を自分からするようになっていきます。

保護者にとっては、参観や通級での指導を通じ子育てをする上での、気付きや安心につながったと考えられる。通級担当の役割は通級指導教室を利用する児童への理解や指導・支援にとどまらず、保護者の心理的な安定を図るという支援も必要である。通級担当が実際の指導場面を見せたり具体的な説明をしたりし、信頼関係を築いていくことが重要である。

(5) 校内支援体制の整備

チームティーチングによる支援や、特定の教科学習の取り出し指導など校内の支援体制を整備していくためには、通

令和2年4月2日

令和2年度 発達障害通級指導教室の運営計画

1 通級による指導とは (各教科の指導ではなく、「自立活動」である。)

「通級による指導」とは、大部分の授業を通常学級で受けながら、一部、障害に応じた特別な指導を特別な場(通級指導教室)で受ける指導形態で、障害による学習上又は生活上の困難を改善し、又は克服するため、「自立活動」による指導を行うものである。

必要があるときは、障害の状態に応じて各教科の内容を補充するための指導を行うことができる。

(文部科学省「障害に応じた通級による指導の手引き」より)

2 対象とする児童

○小学校の通常学級に在籍し、発達障害のある(可能性のある)児童

- ・自閉症(高機能自閉症、アスペルガー症候群)
- ＝自閉症スペクトラム障害(ASD)
- ・情緒障害(主に心理的な要因による場面からんなど)
- ・注意欠陥多動性障害(AD/HD)
- ・学習障害(LD)

※入級条件事項

- ・IQが70以上
- ・主たる障害の実態把握調査のポイントがLD12P、AD/HD6P、高機能自閉症22P以上

※正式に通級指導を受ける場合は、上越市教育支援委員会通級部会(7月、12月、2月)で判断を受ける必要がある。

3 業務日時

○毎週金曜日 8時15分～14時45分

4 指導場所

○スマイル教室

5 業務内容

- ・個別または小集団指導
- ・心理検査の実施
- ・教育相談
- ・授業参観
- ・校内委員会への参加
- ・校内支援会への参加
- ・校内研修の実施 等

図5 通級指導教室運営計画の一部

級担当と担任以外の職員による組織的な対応が必要である。そこで重要なのは、管理職の理解と協力である。通級指導担当と管理職が定期的に話をする機会があり、通級指導教室の役割を理解してくれたり、通級指導担当にも意見を求めてくれたりした。管理職が中心となり、校内の支援体制を整備することで通級指導教室以外の場での支援の質を高め、支援の量を増やすことができた。

4 全体のまとめ・成果

1年目の5月に通級指導を受けていた児童は1名であったが、2年目の1学期終了時点で、12名の児童が通級指導を受けている。保護者は通級指導を受けることを希望しているものの、仕事の都合上、通級指導教室までの送迎が困難な家庭が多かった。巡回指導校になり、校内に通級教室があることで他校への送迎の負担がなくなり、多くの児童が通級指導を受けることができるようになった。

また、他校で児童が通級の指導を受けているケースに比べ、担任との連携が密になった。それは、通級担当者が担任に対して直接助言をしたり担任が通級での様子を参観したりする機会が増えたためである。その結果、担任が対象児への適切な対応の仕方や個別の配慮などを理解するようになり、通級の指導と学級での指導に連続性をもたせることができるようになった。

保護者との連携という点においては、直接会う機会は限られているが、通級担当者から情報を発信し続け、常につながっていくことが必要である。特に、保護者に対しては実際の場面を見てもらったり、「このような対応をしたらこうなった」など具体的な説明したりすることで、支援の効果を理解してもらえた。

通級での指導を受ける児童は、学校生活の大半を自学級で過ごすため、学級での指導・支援の充実を図ることが重要である。学級集団の中で、個への指導・支援を効果的に行うためには、学びやすい環境づくりと担任の姿勢が重要である。学びやすい環境づくりとは、刺激の排除や視覚的な支援などである。担任の姿勢とは、分かりやすい指示や児童への賞賛や評価などである。この2つは、すべての児童にとっても有効な支援になる。通級担当と担任が様々な連携を重ねていく中で、個への指導・支援の土台となる環境づくりや担任の姿勢につながった。

学級全体への指導・支援が、通級を利用している児童にとっても効果的な指導・支援となる。この点において、特別支援教育コーディネーターの役割が重要であった。特別支援教育コーディネーターは、通級担当との連絡調整や担任、保護者との相談窓口の役割をするだけでなく、自身の特別支援教育に関する知識や技能を高めていった。まず、支援のスタートとして、担任に学級全体への効果的な指導を助言し、集団指導の工夫に取り組んだ。段階的に必要な指導・支援を行った上で通級指導の必要性を検討するようになり、学校全体の特別支援教育が充実してきた。これは、通級担当と特別支援教育コーディネーターが連携・協働し、校内支援委員会や個別の支援計画の検討等を積み重ねる中で特別支援教育コーディネーターとしての専門性が高まったからだと考える。

以上のことから通級指導教室担当者としての役割として、専門的な見地からの助言や指導力に加え、周囲と効果的に連携していくことが必要と言える。そのためには、通級指導教室の運営を意図的・計画的に進めながら、学校職員や保護者の理解と協力を得ていくことが必要である。

5 今後の課題

特別支援教育への理解が教育界全体に広がり、今後も通級を利用する児童は増えていくことが予想される。通級を利用する児童の増加に伴い、通級指導教室の新設や通級担当者による巡回指導が増えていくだろう。

発達障害通級指導教室への期待や通級による指導へのニーズに応えるためにも、担当者の役割の理解と資質能力の向上、円滑な教室運営といった専門性が一層求められる。通級担当者でも、特別支援教育に係る経験の浅い教員も増えていることから、担当者が変わった時の引き継ぎや指導・支援の質を向上させるための研修の機会、OJTの仕組みを整えていく必要がある。

通級指導教室では、通級でできるようになったことが学校生活の中でも同様にできるようになることを目指している。通級担当者と学校職員、保護者が連携しやすい仕組みや環境を学校内で整備し、どう強化していくのは、今後も検討をしていく必要がある。

6 参考文献

大南英明監修 山中ともえ編集、『実践！通級による指導』，東洋館出版社，2014年

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所、『小学校・中学校通常学級の先生のための手引書 通級による指導を通常学級での指導に生かす』，ジアース教育新社，2018年

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所、『特別支援教育の基礎・基本2020 新学習指導要領対応』，ジアース教育新社，2020年

文部科学省、『改定第3版 障害に応じた通級に指導の手引』，文部科学省，2018年